



ボサノヴァ： リオデジャネイロの魂のサウンド

ボサノヴァは、ブラジルを代表する音楽ジャンルとして世界的に広く知られています。しかし、それだけではありません。もしリオデジャネイロという街に魂があるとしたら、その魂はきっとボサノヴァを歌うでしょう。



1950年代後半に生まれたボサノヴァは、既存のリズムを融合したもので、主にリオデジャネイロのサンバ、アメリカのクールジャズ、そしてヨーロッパのクラシック音楽から成り立っています。「ボサ」という言葉は、1930年代にノエル・ローザの「Coisas Nossas」というサンバの中で初めて登場しました。「ボサ」は物事のやり方を意味し、「ノヴァ」は新しいという意味です。つまり、ボサノヴァは「新しいやり方」と訳すことができます。サンバのあふれるような躍動感とは異なり、ボサノヴァはささやくように歌われます。波のように揺れるシンコペーションの効いたギターのリズム、親密に語りかけるようなボーカル、そして滑らかなハーモニーはボサノヴァを特徴づける重要な要素です。

トム・ジョビン、ヴィニシウス・ジ・モライス、ジョアン・ジルベルトといったアーティストたちに率いられたボサノヴァは、リオデジャネイロの日常の中にある美しさを描き出す音楽です。たとえば、有名な『イパネマ



トム・ジョビンとヴィニシウス・ジ・モライス

の娘』という曲の背景には実在の女性がモデルとして存在していましたが、ボサノヴァ全体にとって本当にインスピレーションの源となっているのはリオデジャネイロという街そのものなのです。多くの歌詞には、リオデジャネイロの夕暮れ、その海岸沿いを歩く恋人たち、そこで生きる女性たちの永遠の魅力が詠われています。『イパネマの娘』はその代表例で、浜辺へ向かって歩く若い女性の飾らない優雅さを描きながら、リオデジャネイロという街が持つ美しさと、さりげない気品を表現しています。

『コルコバード (Corcovado)』もその好例です。キリスト像がそびえるコルコバードの山を望みながら、アーティストが恋人への想いを歌にした作品です。リオの街並み——山々が海へと流れ込むように連なり、太陽の下にビーチがどこまでも続く風景——がそこにあります。まるで波のリズムや、ヤシの木の揺れ、そして浜辺で過ごすゆったりとした時間の流れが、そのまま溶け込んで作られたかのようなメロディーです。

もちろん、すべての曲がリオデジャネイロを題材としているわけではありません。ボサ



ノヴァの別の代表曲「Desafinado」でトム・ジョビンは、「ボサノヴァはきちんと歌えない歌手のための音楽だ」と批判した人々に対する反論を歌に託しました。「Desafinado」はポルトガル語で「音程が外れた」「調子外れの」という意味です。この曲は、ボサノヴァの繊細でささやくような歌唱法を「音痴」と批判した人々への、ユーモアと皮肉を込めた曲なのです。

1960年代初頭になると、ボサノヴァはブラジルの国境を越えて世界へと広がっていきました。誕生当初はアメリカン・ジャズから大きな影響を受けたボサノヴァでしたが、今度は逆に、ボサノヴァがジャズに影響を与える時代が訪れたのです。フランク・シナトラ、スタン・ゲッツ、オスカー・ピーターソン、エラ・フィッツジェラルドといった名だたる米国のアーティストたちも、その音楽活動の一時期をボサノヴァの探求に捧げました。注意深い聴き手なら、ジャズ曲の中にボサノヴァのビートを聞き分けることができるものがあるはずです。

ボサノヴァのムーブメントは、1964年にブラジルで始まった軍事政権の下で、多くの音楽家が検閲や亡命を余儀なくされたことや、「ボサノヴァはエリートのためだけの音楽だ」という批判などを背景に、1966年頃に一つの社会的運動としての幕を閉じました。しかし、ボサノヴァそのものが消え去ったわけではありません。独立した音楽ムーブメントとしての役割は終えたものの、その音楽は今なお演奏され続けています。そして、ボサノヴァはその後に生まれた数々のブラジル音楽の

スタイルの礎となり、今日に至るまで大きな影響を与え続けているのです。



ボサノヴァは、リオデジャネイロという街の音そのものと言っても過言ではありません。ボサノヴァを聴くということは、イパネマの砂に降り注ぐ太陽のぬくもりを感じ、山々を背景に街の灯りがまたたくのを眺め、そして、ささやくときでさえ踊っているような街の静かな詩情を感じ取ることなのです。単なる音楽ジャンルの域を超え、ボサノヴァは世界中の聴き手を今日も魅了し続けています。

＊新米のボサノバファンには以下の曲がお勧めです：「Garota de Ipanema」「Samba do Avião」「Desafinado」「Insensatez」「Wave」「Pela Luz Dos Olhos Teus」「Ela É Carioca」「Chega de Saudade」「Águas de Março」「Samba de Uma Nota Só」「Corcovado」「Este Seu Olhar」「Só Danço Samba」。

筆者紹介



André Venturini
(アンドレ・ベンチュリーニ)

Global IP Brazil代表パートナー
ブラジル大手法律事務所での特許部門担当パートナーとして特許を扱った十年以上の経験を元に、現在はGlobal IP Brazilの代表弁理士として、

広い技術分野の特許の権利化及び権利行使関連業務を担当。電子工学修士号を持ち、ブラジル特許庁の複雑な手続きについて豊富な知識と経験を有しており、IT、テレコム、石油・ガス業界などの特許ポートフォリオ全般に携わる。特に、ソフトウェア関連発明におけるブラジル初の特許係争や、標準特許の権利行使に関する主要な事件など、ブラジルでの重要な特許訴訟において、特許・技術専門家として豊富な経験がある。

【参考】 <https://www.gip-brazil.com.br>

